三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

第 27 号
2023年9月

有三の描いた武士（もののふ）たち

―深化する作家の人生観―

会期：令和5年9月16日（土）～令和6年3月10日（日）

※山本有三の〈歴史もの〉※

山本有三［1887―1974］は、大正10（1921）年の「坂崎出羽守」を皮切りに、「同志の人びと」（大正12年）、「嘉門と七郎右衛門」（大正15年）、「西郷と大久保」（昭和2年）、「ふしゃくしんみょう」（昭和9年）といった歴史上の武士を題材とした作品を数多く執筆しています。

大正期の文壇では、森鷗外が「歴史其儘と歴史離れ」（大正4年）において歴史小説観に言及したことをはじめとして、史劇・歴史小説をめぐる言説が盛んでした。実作においても、歴史上の人物や出来事を新たな解釈によって捉え直し、近代的なテーマを表そうとする作品が、芥川龍之介や菊池寛などによって発表されていきました。有三の〈歴史もの〉も、こうした文壇の動向を背景に執筆されたと位置づけられます。

歴史を題材とするうえで、有三は史実との整合性よりも、人間性の表現を重要視しました。膨大な史料を紐解き、綿密な調査を行うだけでなく、時に大胆な創作を加えて武士たちの葛藤を生々しく描き出しました。

有三は、創作においては題材を**「何もかもすっかり自分のものにしてしまって、それを自分の腹の中で煮立てて、蒸発させ」**[*1]ることを念としていました。「坂崎出羽守」では、**「坂崎の中に自分を見出すと共に、自分を坂崎の中に投げかけた」**[*2]とまで述懐しています。作中の武士たちの心情には、有三自身の内面をも垣間見ることができるでしょう。

※深化する作家の人生観を見る※

有三作品の武士たちは、いずれも抜き差しならぬ人生の難局に直面し、武士としての立場と、一人の人間としての心情のせめぎ合いに懊悩（おうのう）しています。葛藤の末に彼等が選択する道筋は、時代とともに、「死」から「生」を志向するものへと変容を遂げていきます。

有三の〈歴史もの〉の第一作である「坂崎出羽守」では、主人公の坂崎直盛は、家康に約束を違えられた無念さに耐えかねて暴挙に及んだ末、**「乱心ものとして助かるよりは、正気の人として死んだほうが、ここちよい」**[*3]と切腹を選んでいます。しかし、その6年後に発表された「西郷と大久保」では、自分の命の捨て場所として朝鮮出兵を望む西郷隆盛と、その心情に理解を示しつつも国家の大局のため死に追いやるわけにはいかないと、厳しく西郷を退ける大久保利通を描いています。さらに7年後の「ふしゃくしんみょう」では、武士としての矜持から決断した決死の城攻めが失敗に終わり、多数の犠牲を出したことを悔やみながら、命を捨てることと、命を惜しまぬことの違いを痛感し、「惜身命」の境地に向き合う石谷十蔵を描いています。

有三は、戦後の随筆「竹」（昭和21年）のなかで、武士が桜に喩えられるのは、その散りぎわの潔さが、生命よりも名誉を重んじる精神性に通じるためではないかと推測しています。その武士にこそ、「死」によってあがなわれるものよりも、「生」によって活かされるものを選び取らせていったことに、己の一生をいかに活かすべきかに思いを巡らせる有三の、人生観の深まりを見ることができるのではないでしょうか。

＊1…「芸術は「あらわれ」なり」（大正10年5月）
＊2…「坂崎出羽守」と悲劇の主人公」（大正10年9月）
＊3…「坂崎出羽守」（大正10年9月）

（文芸企画員・学芸員　三浦穂高）

コラム

吉野源三郎のために書かれた「ふしゃくしんみょう」

「キング」第10巻第1号（昭和9年1月）

実在の武士・石谷十蔵を主人公とした「ふしゃくしんみょう」。武士として**「常づねいのちを惜しんでこそ、一大事の場あいに、はじめて不惜身命の働きができる」**という教えに真摯に向き合おうとする主人公を描いた本作は、〈歴史もの〉の妙手である有三の魅力が存分に発揮された作品と言えます。

実はこの作品は、岩波新書の創刊に携わり、「君たちはどう生きるか」の著者としても知られる吉野源三郎のために有三が書いたものです。昭和6（1931）年、左翼へのシンパ活動が治安維持法に抵触し、逮捕された吉野は、1年半の入獄生活中、心身の疲労から自殺を計りました。その知らせを聞いた有三は「ふしゃくしんみょう」を執筆し、出獄後の吉野に贈ったのです。

> **「不惜身命」も、山本さんは私に、「君のために書いたのだ」といわれた。危く死ぬはずのところを助かって出獄して来た私に、山本さんは、不惜身命と書いた指物を背に常に勇猛果敢に戦って来た石谷十蔵が、後年、「惜身命」の境地を悟った話を書いて贈って下さったのである。**
>
> **（山本有三全集　第10巻付録　吉野源三郎「山本さんと私」　新潮社　昭和52年）**

命を捨てるよりもなお難しいことがあると十蔵に思い至らせた「惜身命」の境地。未来ある青年へ向けた、有三の切々とした想いが伝わってきます。

第9回　三鷹市山本有三記念館スケッチコンテスト作品募集

四季折々の姿を見せる山本有三記念館をあなただけのタッチで描いてみませんか。コンテスト終了後、受賞作品は山本有三記念館で展示します。有三記念公園は入場無料です。お気軽にスケッチにお越しください！

募　集　期　間：令和5年10月1日（日）～12月28日（木）
コンテスト：令和6年1月20日（土）～1月28日（日）　会場：三鷹市公会堂さんさん館2階展示室
受賞作品展示：令和6年2月6日（火）～3月10日（日）　会場：三鷹市山本有三記念館

※応募詳細につきましては、当記念館までお問合せいただくか、ホームページをご覧ください。

事業報告

5月 第14回 春の朗読コンサート

去る5月12日・13日、朗読家の野田香苗さんとヴァイオリン奏者の中村千鶴さんをお招きし、春の朗読コンサートを開催しました。野田さんの朗読による山本有三の小品「兄弟」、「ウミヒコ・ヤマヒコについて」と、中村さんの演奏によるバッハ「プレリュード」、イザイ「バラード」のほか、お二人のコラボレーションによる戦後の随筆「「銀河」のはじめに」を披露していただきました。来場者からは「すごく近い距離で朗読と演奏を聴くことができ、心が洗われた」などの声が多数寄せられました。

新刊のご案内

このたびの企画展開催に合わせ、『波』『女の一生』『生命の冠　坂崎出羽守』に続く三鷹市山本有三記念館文庫の第4弾、『ふしゃくしんみょう　米百俵』を刊行しました。武士を題材とした「同志の人びと」、「嘉門と七郎右衛門」、「西郷と大久保」、「ふしゃくしんみょう」、「米百俵」の5作品を収録した読み応えのある一冊です。企画展にあわせて、この文庫で有三の〈歴史もの〉の世界をよりお楽しみいただけます。

価格　750円（税込）
販売場所　山本有三記念館受付
公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団通販ストア

ガイドボランティア

土・日・祝日の午後1時から4時まで、展示や建物の解説を行っています。
事前申込は不要です。お気軽に声をおかけください。

編集・発行
三鷹市山本有三記念館
〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 2-12-27
TEL：0422-42-6233
URL：https://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/
過去の企画展館報をホームページで公開しています。　@BungeiMitaka

開館時間：午前9時30分～午後5時
休　館　日：月曜日及び年末年始（12/29～1/4）
月曜日が祝日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館
入　館　料：300円（20名以上の団体200円）　年間パスポート 1,000円
●中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭、「東京・ミュージアムぐるっとパス 2023」利用者は無料
アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分、
JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口（公園口）より徒歩20分
三鷹駅南口よりみたかシティバス「むらさき橋」下車徒歩2分
吉祥寺駅南口より小田急バス「万助橋」下車徒歩5分

史劇「坂崎出羽守」と講談本「番町皿屋敷」

奥野 久美子（大阪公立大学 教授）

「坂崎出羽守」（大正一〇年九月「新小説」、同月市村座初演）は、山本有三文学における記念碑的な作品として評価される[1]。また本作が有三に無断で映画化されたことに端を発する「坂崎出羽守」事件（大正一四年、以下〈事件〉）も知られる[2]。

今回注目したいのが、注1の岩波氏が「講釈にもなっているように、素材は必ずしも新規なものではない」と述べる、講談（講釈）・講談本（講談を速記した体裁の本）である。

一枚、二枚、…のお菊さんの怪談ものの一つとして知られる講談「番町皿屋敷」において、千姫は舞台となる吉田御殿の女主人で、後に御殿を青山主膳が拝領、その下女がお菊である。有三も「吉田御殿の千姫は淫婦の代表者ですが、此〔本作の〕千姫は少し理屈もこねる近代的な女性の一面を備へてゐます」（「東京朝日新聞」大正一四年七月五日朝刊「山本氏の反駁状」）という通り、講談では、坂崎を拒み美男の大名本多に嫁すが、夫は若くして死去。千姫改め天樹院は吉田御殿に移り、二階から見目よき男を探しては引込み、弄んでは殺して井戸に投げ込んだ。

この伝説は当然フィクションで、江戸時代の講釈師、馬場文耕の実録「皿屋舗弁疑録」にその原型が盛込まれ、後世に影響した（小二田誠二「実録体小説の原像―「皿屋舗辨疑録」をめぐって―」日本文学協会「日本文学」一九八七年一二月）。この伝説を含む講談の千姫坂崎伝説が、本作発表当時よく知られていたことは、以下のように本作の同時代評からもわかる。（傍線引用者）

・「吉田通れば二階からまねく、しかも鹿の子の振袖で」といふ有名な俗謡を残した吉田御殿の主人公、千姫の半生のために、最も大きな悲劇を生み出したのは坂崎出羽守成正である。（千葉亀雄「九月の雑誌から」「演藝画報」大正一〇年一〇月）

・〔岡村柿紅の発言〕講釈に残つて居るものもありますが、講釈は話を造り上げてしまふといふ事ですから…（五九頁）

・〔同右〕大詰に、但島（たじま）〔柳生但馬守〕が出るにしても唐突であつた。〔中略〕講釈でも聞いた人は、その間の関係は解るが、（六二頁）（以上「市村座の『坂崎出羽守』芝居合評会」「新演藝」大正一〇年一〇月）

・私は坂崎出羽守を必ずしも講談本にあるやうな執着の強い人間に描いて貰ひたいといふのではない。（本間久雄「史劇と文化的解釈」「早稲田文学」大正一〇年一〇月）

・是〔坂崎出羽守の史実〕が人口にくわいしやして居る実例としてはひ史〔稗史＝小説〕講談の類枚挙にいとまありません。私はこの類の書十数冊を法廷に差出してあります（一、マテリアル）

・千姫は吉田御殿の口碑等に依つても想像され得る性格（四、キャラクター）（以上「落合氏の公開状」〈事件〉で映画脚本を書いた落合浪雄）「東京朝日新聞」大正一四年七月五日夕刊（前四日夕方発行）、これに反駁したのが「山本氏の反駁状」）

このように、同時代における千姫坂崎伝説は、講談に拠るところが大きい。当時の講談は庶民から知識人にまで親しまれていた。しかし、皿屋敷物の元祖とされる実録「皿屋舗弁疑録」や、明治以降の講談本では、千姫救出場面は省略か簡略化されたものが多い。本作の初出版では、第一幕第二場が千姫救出場面にあたるが、この場は後に省かれ、『山本有三全集 第一巻』（昭和五一年 新潮社）の本文にも入っていない。しかし初演時にはこの場の最後のト書、「成正は美しい千姫を肩にして心持よささうに歩き出す」という場面が注目された（既出「新演藝」の「市村座の『坂崎出羽守』芝居合評会」）。

明治大正期の講談本で、坂崎が千姫を自身で担いで城を出る様子や、その際の顔の火傷まで、詳細に描いているのは、管見の限り以下の二作である。

①松林伯圓講述・酒井昇造速記「小説／番町皿屋敷」第一席（「百花園」第二二号 明治二三年三月）＊坂崎と千姫の話は第一席のみ。

②悟道軒圓玉講演・浪上儀三郎編『実説怪談／番町皿屋敷』（長篇講談第八四編、大正一一年七月 博文館）＊初出連載「中外商業新報」大正五年一二月一一日～同六年六月一五日、坂崎と千姫の話は長篇講談本では第一～二席の半ば、連載では初日第一席～一二月一九日第九席の半ばにあたる（姫と本多の新居に坂崎の亡霊が出るところまで）。

②の圓玉は①の伯圓の弟子で、②は師から「口写しに教へを受け」たものという。しかし両者には違いもあり、内容を有三作品と比べつつまとめると以下のようである。

救出した者に姫を嫁がせる約束

①伯圓：徳川二代将軍秀忠（千姫の父）が「城中より姫を助け出したる者には其姫を遣はし相当の禄をも与へるで有らう」と言う。

②圓玉：救出前は家康から「重き賞を取らす」とのみ。救出直後、家康が坂崎に「其方に此千姫を取らせる」と言う。

③有三：家康が坂崎に「美事その方が助け出したら、姫はその方の妻にとらせるぞ」と言う。

城内と姫の様子、火傷の場面

①伯圓：坂崎が城の奥殿まで入り、自害すると言って読経している千姫を背負い、自身の甲を千姫君に被らせ、中雀門から出る際、その屋根が焼落ち、赤銅の瓦で顔に火傷。

「百花園」22号・挿絵
（画工：東洲勝月、大阪公立大学吉沢コレクション蔵本）

②圓玉：坂崎が城の奥深く進むと姫が念仏を唱え、侍女四五人が控える。自害するというのを引抱え、侍女を蹴倒して馬に乗せる。自身の兜で千姫の頭を蔽い、桜門を過ぎようとしたがその屋根が焼け崩れて、銅の瓦で右頬を火傷。

博文館長篇講談第84編・表紙
（架蔵本）

③有三：奥殿の場面はなく、坂崎が「顔面に火傷を負ひ乍ら千姫を肩にかついで出て来る」（第一幕第二場、のち削除）

坂崎の最期

①伯圓：千姫が坂崎を拒否。坂崎は籠城して将軍を相手に戦うという。説得に行った柳生但馬守が翻意せぬ坂崎を斬る。その後千姫は本多出雲守忠知を見そめて嫁ぐ。

②圓玉：千姫が坂崎を拒否。菊見の宴で本多中務大輔忠刻を見そめ、嫁ぐことに。坂崎は千姫を奪い、刺殺して自殺するという。柳生但馬守が上使として説得に当たるが断られ、将軍が討手を向けようとするところ、本多上野介がとりなし、坂崎の家老二人に、主人に自殺を勧めろという。二家老は主人が泥酔し眠っているすきに殺害。自殺の体で申出ようとするが、討手が押し寄せ、主殺しの罪で斬首に処された。すべては本多上野介の策略。

③有三：千姫は坂崎を拒否し本多平八郎忠刻に嫁ぐ。輿入れの日、坂崎は柳生但馬守の説得により「思切つて辛抱」するが、酔って輿入れの提灯を見るうち、槍をとって行列に乱入。「余は乱心者となつて助かるよりは正気の人として死んだ方が心地よい」と切腹の用意をし、幕（初出より）。

有三は先の「反駁状」で、「多くの伝説の略（ほぼ）一致してゐる所」として以下の三点を挙げる。

（1）千姫を救ひ出した者には姫を妻にやると家康が約束した事

（2）出羽が姫を救ひ出したが、姫は出羽を嫌つて本多に嫁入りした事

（3）出羽はそれを怒つて謀反しようとし家臣に殺された事（或は狂死せしといひ、切腹を仰せつけられし等）

②の圓玉の講談は、この三点におおよそ一致し、有三の示す千姫坂崎伝説の要素は、講談の筋とほぼ重なる。そして講談にはない設定や人物造型にこそ、有三のオリジナリティがある。

なお有三が本作の材料に出会ったのは「もう七八年も前のこと」（「悲劇の主人公と―『坂崎出羽守』〔下〕」「讀賣新聞」大正一〇年九月七日、全集収録題「坂崎出羽守」と悲劇の主人公」）という。大正二、三年頃ということだが、大正五年末に東京の新聞（「中外商業新報」＝現在の「日本経済新聞」）に連載された圓玉の講談を有三が目にした可能性も、なきにしもあらず。そして本作初演の翌年に出版された②の講談本が、全体からすれば些末な一挿話にすぎない千姫救出場面をわざわざ表紙にしているのは、初演の評判を当て込んだのかもしれない。

1「この「坂崎出羽守」によって有三は戯曲家として世間から高い評価を受けるようになった」（日本近代文学大系第四一巻『久保田万太郎・山本有三集』一九七三年 角川書店、「坂崎出羽守」補注一、小島彬）。「最初の歴史劇であるだけでなく、以後、現代を扱った社会劇を書かなくなったという意味で、重要な転機」（岩波剛「山本有三と「坂崎出羽守」」講座 日本の演劇5『近代の演劇I』一九九七年 勉誠社）。

2〈事件〉については植木賢一「山本有三および文芸家協会「著作権法中改正法律案」における〈アイデアと表現〉問題のゆくえ」（「早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊」二〇〇八年二月）に詳しい。天野広也「「坂崎出羽守」」（「解釈と鑑賞」二〇〇八年六月）は多くの同時代評をふまえて論じ「多様な論点から言及し得る作品」とする。

奥野（おくの） 久美子（くみこ）

昭和51（1976）年、名古屋市生まれ。
専門は日本近代文学（芥川龍之介を中心とする大正期文学、講談本など）。
著書に『芥川作品の方法―紫檀の机から―』（和泉書院 2009年）、論文に「石川五右衛門ものの明治大正期における展開―実録・講談本から小説・戯曲へ」（岩波書店「文学」16（4）2015年7月）などがある。